

孫が生まれるぐらいの初老のカップルだったんです。でも結局、結婚を楽観視している若いカップルと、離婚を決めたカップル、その対比を見せることになりました。この物語は必ずしも私の個人的な体験ではありません。どちらかというと私が魅了されたのはテーマだったんです。

——今回、映画化が決まった時はどう感じましたか。

実は映画化できたのは、コロナのおかげです。と言うのは、ロンドンでのリバイバル公演が決まっていたところでコロナ禍になり、ロックダウンが始まって私は悲しみのどん底につき落とされました。そこで、旧友の映画プロデューサーに、『トウモロコシ』を映画にできないかな？と軽く相談したら、翌週にはやろう！と、どんどん話が進みました。最初はもったこじんまりした映画のつもりでしたが、みるみる大規模になっていきました。

——サマンサ・パークスとラミン・

カリムルー、ミュージカル界のトップスター二人が配役されたと知った時は？

誰をキャストイングするかを挙げた時、二人はリストの上位にいました。でも二人とも忙ししいし、難しいだろうなあと思っていたんです。サマンサは15年ほど前、コンサートで僕の曲を歌ってもらったことがありました。ラミンとは関わりがありませんでしたが、サマンサとラミンは



キヤット&キャサリンを演じるのは歌姫サマンサ・パークス。ウエストエンドの『アナと雪の女王』でエルサ役

共演したことがあり、お互いをよく知っていました。良い化学反応が起きている二人ならびつたりだと、夢のようなキャストイングが叶ったんです。

——舞台版では結婚前のカップルと離婚前のカップルが異なるキャストで演じられますが、映画では同じキャストが演じ切っています。

舞台ではその2組が同一人物かどうか、分らないままに進むんです。最後になって気付いたり気付かなかったり、そこが鍵でもあるわけですが。ただ映画となるとより現実性が勝り、曖昧さは通用しません。まして、結婚前のカップルと離婚前のカップルでは10年しか違わないので、それほど大きな変化もない。その辺りのリアリティを考えて、結婚前と離婚前、どちらのカップルも同じ俳優でやることになりました。

——音楽は変わっていますか。

はい。このミュージカルは06年にロンドンで初演、その後、シカゴ、ニューヨーク公演を経て、東

京で完成形になりました。しかし21年にこの作品を振り返ってみたら、ちよつと古い気がして。現代に合う作品にしたかったので、音楽を全曲新たにアレンジし、時代に合わせて作り直しました。舞台版では少人数のバンド演奏でしたが、映画ではオーケストラ編成となっています。新曲〈Wide〉

は、元々あった人生を振り返る曲〈Autobiography〉が今にそぐわないなど、変更した中で生まれました。新曲を作ろうというよりは、既存曲をどんどんアップグレードしたら、違う曲になった流れです。キヤットが歌う〈The Girl In The Mirror〉は舞台ではショートストップ曲ですが、もつと進化させたいということ。〈I've Met My Match〉になりました。映画では登場人物が増えてより会話をらしくなり、デュエットや重唱で面白いナンバーが生まれましたね。

——そもそもミュージカルを作ろうと思ったきっかけを教えてください。